

(2)岩手県教育委員会の取組

森本 晋也 (岩手県教育委員会 指導主事)

皆様、おはようございます。岩手県教育委員会の森本でございます。さきほども村上先生のほうからお話ありましたが、全国からの多大な支援をありがとうございます。私は震災の前年度まで釜石東中学校で村上先生のもと防災教育に携わっており、手引きづくりにも携わっていました。震災の時は一関市で、震災直後は釜石市の教育委員会のお手伝いをしていました。4月からは、大槌町教育委員会に赴任して、学校再開のお手伝いをしていました。本当にたくさんの支援が、学校を再開していくときに、子どもたちにとっても先生方にとっても私たち職員にとっても大きな糧になりました。現在、岩手県の教育委員会で復興教育を担当していますが、今も全国から支援をいただいて本県頑張っております。この場をお借りして御礼申し上げます。

私の方からは岩手県の復興教育ということで、震災をうけて岩手県が進めている教育について、考え方と内容を紹介させていただきたいと思っております。釜石の先生方にはこれまでご説明させていただいているところなので繰り返すになりますがご了承ください。

- 3.本当に大きな自然災害に見舞われたわけですが、片田先生の教えにあるように私たちのふるさとには豊かな恵みがあって、そこに豊かな文化があって、時に襲う自然災害からどうやって生き抜いていくか、片田先生からは作法というお話も伺いました。自然とともに生きていく我々の知恵・文化まさに津波災害文化をどう作っていくかというのが一番大きなところだと思います。
- 4.震災で大きな犠牲があったわけですが、一瞬にして普段の日常が奪われるという辛く、本当に大変な状況の中でした。
- 5.しかし、子どもたち、先生方が的確に判断し避難して、命を守り抜いたところ、本当に大変な状況の中で支え合って、卒業生が避難所で懸命に働いていたり、子どもたちの震災のときの姿から私たち教員は大切なことに気づかされ、教育って何なのかを考えさせられました。
- 6.そういった中から県の教育委員会では、本当に辛い体験だったのだけれど、これをどう受け止めてこれからどうやっていこうかという中で、大変だった経験の中にも教育的な価値があるのではないかと考えました。当時の県の教育長

はじめに一自然の二面性と人々の知恵・文化一

豊かな自然の恵み・文化

時に人々を襲う災害

自然と共存する人々の知恵・文化

3

ひとつづつ つらい経験にも教育的価値

震災の経験を子ども達がどう受け止め、これからどう生きていくべきなのか？

震災・津波を乗り越え、未来を創造していくために、10年後、20年後の岩手県を支えていける子どもたちの育成を目指す。

そのために

各学校でふさわしい復興教育に取り組む

震災・津波に伴う経験はそれぞれ貴重な教育的価値をもっている

- ・新しい防災教育
- ・体験(教訓)から学ぶ教育活動

被害の多寡によらず、県内全ての子ども一人一人が震災津波と向き合い、自分自身を見つめ、他者や社会とのかかわり考えることが重要

平成24年度

平成25年度

「いわての復興教育」プログラム

「いわての復興教育」プログラム【改訂版】

「いわての復興教育」とは？

①「目的」復興・発展を支えるひとつづつ

②「育てる場」全教育活動

③「育てたいもの」3つの教育的価値

8

は辛い経験にも教育的価値があり、これからの未来の岩手県、日本の社会を支えていける子どもたちを育成しようということで、復興教育をスタートしました。

- 7.震災後一年かけて復興教育のプログラムをつくり、さらにもう1年かけて整理して、本県のこれからの教育のあり方を示したものが「いわての復興教育」プログラム改訂版というものになります。
- 8.その中で改めてこれから何をめざすかということで「いわての復興教育」の目的を定義づけました。その際、何を大事にしていこうか、何を教育的価値にしていこうかというものを学校にとってもわかりやすく整理し図の通りしたのが「いきる、かかわる、そなえる」になります。
- 9.これまでやってきた教育とは何が違うのか。これまで私たち岩手県では、ひとづくりを目指してやってきました。この震災の経験を踏まえてさらにこのひとづくりを補充・補充していこうということが岩手の復興教育の基本的な考えになります。
- 10.そして何を大事にしていこうということで、教育委員会内でもかなり討議しました。専門家の話も伺いながら、あらためて大事にしていこうと整理したものが、「命、心、“いきる”、家族や人とのつながり、“かかわる”、そして防災、安全ということで“そなえる”ということ。“いきる、かかわる、そなえる”という三つを教育的価値としました。
- 11.さらにこの三つの教育的価値について、もう少し具体的なものを示そうということで、内容を示したものが具体の21項目です。「かけがえのない命」や、「自然との共存」、「価値ある自分」どんな状況でも自分というものが必要とされる、自己肯定感などです。
- 12.ソーシャルサポート認知と安全教育を改めて勉強していく中で、「自分の命が大切にされている・思われている子どもは、より自分の命を大切にしようとする」というお話も伺い、価値ある自分の考えというのは、防災教育にとっても非常に大事ななと思いました。また、震災の中で夢や希望を持っていること、改めて「やり抜く強さ」など支援の方から学んだ部分もあります。あとは「心の健康」がありますが、県の大きな事業の柱にしています心のサポートや、からだの健康、仮設住宅仮設校舎で十分なからだの運動もできないという状況もあります。避難には体力も必

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 #06

【目的】 「いわての復興教育」の推進 5つのポイント

①【目的】 「いわての復興教育」の目的を整理した。

【震災前からの目的】 「知・徳・体」を備え調和のとれた人間形成 「ひとづくり」

【「いわての復興教育」の目的】 郷土を愛し、その復興・発展を支える人材の育成 「復興・発展を支えるひとづくり」

補完・充実

【根底】 震災津波を乗り越えて、未来を創造していくために、10年後、20年後の岩手の復興・発展を担う子どもを育成すること。

9

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 #07

【目的】 「いわての復興教育」の推進 5つのポイント

②【教育的価値】 震災津波の経験からクロスアップされた教育的価値を明らかにした。

震災津波の経験を後世へ語り継ぎ、自らが在り方を考え、未来志向の社会をつくるのが必要
震災津波の体験からクロスアップされた教育的価値を3つに分類し、テーマを付ける。

1 生命や心について【いきる】
2 人や地域について【かかわる】
3 防災や安全について【そなえる】

「いわての復興教育」の教育的価値

10

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 #08

【目的】 「いわての復興教育」の推進 5つのポイント

③【教育的価値一覧表】 3つの教育的価値と具体の21項目からなる教育的価値一覧表を作成した。

「いわての復興教育」における3つの教育的価値と具体の21項目

教育的価値一覧表	
3つの教育的価値	具体の21項目
1 生命や心について【いきる】 震災津波の経験を踏まえた生命の大切さ・心のあり方・心身の健康	①～⑦
2 人や地域について【かかわる】 震災津波の経験を踏まえた人の絆の大切さ・地域づくり・社会参加	⑧～⑭
3 防災や安全について【そなえる】 震災津波の経験を踏まえた自然災害の理解・防災や安全	⑮～⑳

11

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 #08

3つの教育的価値 具体の21項目

①【かけがえのない生命】
全員の生命は、かけがえのないものであることを実感し、大切にす。
②【自然との共存】
自然の恵みや美しさに感動すると畏敬の念をもち、自然と共に生きることに
ついて考える。
③【価値ある自分】
どのような状況においても、自分の存在を認め、必要とされる存在であることを
認識する。
④【絆や希望の大切さ】
夢や希望をもつことは、生きる価値を見出すことであり、つらく厳しい状況
を乗り越えられることにつながることを実感する。
⑤【やり抜く強さ】
救済活動などに従事した人々の働きと苦勞を通して、どんな状況においても
やり抜く強さについて考える。
⑥【心の健康】
つらいことや悲しいこと、環境からくるストレスなどを感じた時の対処方法を
学び、自分自身の健康を維持する。
⑦【体の健康】
周囲の環境を理解し、状況に合わせて安全に気をつけて選んだり、運動
したりする。

12

「いわての復興教育」プログラム | 改訂版 #09

3つの教育的価値 具体の21項目

①【家族のきずな】
安心して生きていくための生活基盤として、家族の絆や家族の一員としての
責任を実感する。
②【仲間や地域の人々とのつながり】
幼児や高齢の人々・障がいのある人々等と一緒に生活している地域社会に
おいて、自らを支え合う仲間の人々や地域の方々のありがたさを実感する。
③【震災前や海外の人々とのつながり】
苦しみや悲しみに包まれている人々を支援している人に感謝し、共に協力す
ることの大切さを実感する。
④【ボランティア】
他の人や地域社会に役立つことを自分から選んで実践し、他人の喜びを自分
の喜びとして実感する。
⑤【自分と地域社会】
自然災害が、暮らしの変化や地域経済に与える影響について理解し、自分と
地域社会との関係について考える。
⑥【地域づくり】
暮らしと美しい自然、伝統行事・郷土芸能、温かい人々のつながりのある社会、安
全なまちを願い、地域づくりにかかわる。
⑦【震災・復興へのあゆみ】
震災津波で被害を受けた交通網や産業、住宅やまちの復旧・復興の状況を
調べ、安全で生き生きとしたまちづくりにかかわる。

13

要です。

13. “かかわる”というところでは家族の絆、つながり、仲間、地域のボランティアなど地域をどう自分たちがつくっていくかを大事にしています。ここで表記を社会参画にしました。「今の子どもたちが主体的にこの社会をつくっていくんだ」という意味を込めて社会参画という言葉もいれてあります。
14. “そなえる”では、防災、安全というところで今回の震災から自然のメカニズム、学校・家庭・地域で日頃備えていくこと、自分の命を守っていくことを示しております。
15. 県の教育委員会ではこれをもとに、あとは自分の学校にふさわしい復興教育・防災教育を進めてくださいという方針でやっています。あくまでもボトムアップといいますが、この考えに基づいて各学校でやっていただきたいと思います。県の調査では今、県内 100%の学校で推進していただいているという状況です。
16. さらにこれを学習していく資料・教材が必要だろうということで、本年度「いきる、かかわる、そなえる」というタイトルの復興教育の副読本を刊行したところです。これを出すときにさまざまなご意見はあったのですが、これから5年10年と経っていったときに、阪神淡路大震災を思っても、釜石でのこれまでの津波の歴史を振り返ってもどうしても、忘れてしまう部分があります。そこで教訓を学習の資料として残していくためにも副読本が必要だということで今年度作成したところでした。さきほどの21項目にそれぞれ合うような資料を入れてあります。「いきる、かかわる」についてはアトランダムに入っているのですが、「そなえる」については体系的に資料を組んであります。
- 17-19. 自然とともに生きる、考えることになるような資料・教材や、「そなえる」では危険を予測する、家庭での備え、地域での発信などが盛り込まれています。
20. いわたの復興教育の中で、防災教育については特に重要なものとして位置づけ推進しています。
- 21-22. 学校安全の意義を踏まえてもう一回しっかりやっていくことが岩手の復興教育の充実にもつながります。「安全教育で目指しているものは、安全文化の形成です。これをしっかりやっていくことは岩手の復興教育の推進になる」ということを各学校にはお伝えして「特別にあるものではなくて、何を大事にするか」ということでひとつづくりを

『いわての復興教育』プログラム | 改訂版 09

3つの教育的価値 具体的21項目

※【東日本大震災津波の様子と被害の状況】平成23年3月11日に発生した、東日本大震災津波の様子と被害の状況について理解する。

※【自然災害発生メカニズム】自然災害が発生するメカニズムやそれぞれの災害について理解する。

※【自然災害の被害】過去に起きた自然災害や自然災害と共存してきた人々の努力や工夫などについて調べ、防災・減災について理解するとともに、次の世代へ語り継いでいく。

※【自然災害のライフラインへの影響】震災時の被害による水道、ガス、鉄道、ガソリン、道路などの供給・輸送システムやその大切さを理解し、ライフラインが止まったときに対応できるようにする。

※【災害時における情報の収集・活用・伝達】災害時における情報の収集、伝達、判断、発信の方法などについて理解し、活用できるようにする。

※【学校・家庭・地域での目標の確立】避難場所や避難方法、避難経路を把握して、安全に避難する。家具の安全対策、避難の方法や持ち合わせの準備、非常持ち出し品、避難経路についての正しい理解など、学校や家庭でできる防災対策を行う。地域の防災システムを理解し、防災意識を高めていく。

※【命を守り、生き残るための技能】危機を予測し、災害や事故に直面した際に自らの命を守り、被害を最小限に止め、非常時に生き残る技能を身に付ける。(応急手当や心肺蘇生法、消防活動など、必要に応じて、体験的対応)

いわての復興教育副読本『いきる かかわる そなえる』

※ 3つの教育的価値と具体的21項目に対応

小学校・低学年用

小学校・高学年用

中学校用

15

副読本の構成

【基本】

- 3. 11を忘れさせないため、風化させないための教材。
- 子どもたちの発達段階や学習状況等に対応した教材。
- 『いわての復興教育』プログラム(改訂版)に連動。
- 3つの教育的価値と具体的21項目に対応。

【いきる】

具体的21項目の①～⑦に対応した教材をアトランダムに掲載。

【かかわる】

具体的21項目の⑧～⑬に対応した教材をアトランダムに掲載。

【そなえる】

具体的21項目の⑭～⑳に対応した教材を系統的に掲載。

1「震災津波の被害の様子と歴史」→2「自然のメカニズムと被害の特徴」→3「危険予測と判断や行動・訓練」→4「状況に応じた対応」→5「社会への影響・家庭での備え・地域での取り組み」

16

平成20年度『いわての復興教育』の推進について 学校教育復興教育担当

1「学校支援」 2「研修会」 3「副読本」 4「防災教育」 5「推進体制」

対応の方向性

具体的取組内容

17

安全文化の形成

『いわての復興教育』

いきる かかわる そなえる

災害安全(防災教育)

生活安全 交通安全

22

進めていきましょう」と説明させていただいています。

23.どの県でも進められている防災教育・防災管理・組織活動というところで、本県でも改めて学校・家庭・地域の連携が大事だと思っています。そして学校・地域の防災力も向上していければと思います。学校と市町村の危機管理担当を結ぶっていうところでも地域や家庭に入っていく一つと思っています。学校の防災力が地域の防災力、安全力にもつながると思います。ある学校の校長先生が「学校と地域がつながっているっていうことは命がつながっているということがわかった」というお話をいただいて、その通りだなと感じているところです。

24.県の教育委員会では1年間にストーリー性を持って研修を進めていこうと考えています。

25.具体的には4月に防災教育研修会を開催しています。私自身、震災以前に釜石で教員をしているときに、「防災教育についてやらないといけない」と思ったのは釜石市教育委員会が開催した防災教育研修会がきっかけでした。当時の教育長から言われた言葉は「99%の確率で宮城県沖地震が心配されている。災害があったときにどんなことがあっても先生方には子どもたちの命を守って欲しい」というメッセージでした。その後、片田先生から教職員、保護者、子どもたちのアンケート結果を示されて、「これでは救えない」、「こういう状況なんだ」というお話がありました。ここは津波の常襲地域であることを歴史から学び、カルチャーショックを受けまして、そのとき非常に必要性を感じました。そのあと転勤した先が釜石東中学校でした。今は県の教育委員会に行き、正直各学校が全部きちんとできていない中でどうやっていけばいいのかなと思いました。当時一教員だったときのことを思い出して、「内発的に何か働きかけることをやらなければならないんだ」ということを改めて感じているところです。また釜石東中学校は市の協力校でした。そういった外発的な働きかけの両方が必要なのだと思っています。今年度の教育研修会では、片田先生から「実行性のある教育をやり続けることも大事なのだ」というお話をいただきました。また「ソーシャルイノベーションのキーワードは“共感”である」、「人の心を動かすのは“共感”である」という言葉も印象に残っています。

26.難しい壁としては、市町村の防災担当の方々の中に「な

本県における防災教育の目的

学校・地域の防災力の向上

防災教育 (1) 児童生徒が自然災害の危険に際して、自然災害を予測・回避

防災管理 (2) 学校・家庭・地域の関係機関が連携した防災体制の確立、防災教育の推進

組織活動 (4) 学校・家庭・地域・関係機関が連携した防災体制の確立、防災教育の推進

連携して、防災教育と防災管理を一体的に推進していくための学校防

県の防災教育関係事業について

① 県防災教育研修会(4月)

各校・各地域にて具体的な取組・実践

県・県教委による推進・支援

② 「いわての復興教育」推進事業

③ 防災教育に係る学校防犯事業

④ 実践的防災教育総合支援事業

⑤ 県総合防災訓練における取組

⑥ 県総合教育センターでの研修

⑦ 防災教育教材(岩手県・岩手大学)の活用

⑧ 防災教育実践交流会(2月24日)

H26 県防災教育研修会(4月30日)

県教委・県総合防災室の連携事業

実効性のある教育を!!

- ▲ 大人が逃げない子どもも逃げない
- 「逃げる」を内発的に持ち、行動化できる。
- 思い・熱意が動かし。
- 子どもたちを育む環境をつくる。
- ソーシャルイノベーション(社会変革)のキーワードである。
- 「語り継ぐ」→「やり続ける」が大切である。

中学校区を中心に
小・中・県立学校、市町村教委・市町村(防災担当)で、連携の課題、解決策を協議する。

講師 群馬大学片田教授

H26県防災教育研修会 イメージトレーニング型訓練の内容

付与情報(前提条件)A

9月1日(月)午後12時30分(定時は、18時30分)、雨がつつよく降ってきました(20mm/h)。大雨警報発表。あなたは、職場にいます。児童・生徒等は、学校です。

付与情報(前提条件)B

9月1日(月)14時30分(定時は、20時30分)、短時間のうちに大雨(78mm/h)。大雨(土砂災害)、洪水警報発表。停電。児童・生徒は、学校にいます。

イメージトレーニング型訓練
与えられた情報から災害対応をシミュレーションする。

【結果】
○意味・意義を学ぶことができた。
○三者で話し合うことで、課題が明確になった。(防災担当者の参加が有意義)
○事前のシミュレーションの大きさが分かった。

【課題】
▲市町村防災担当者の参加市町村数
H25 23/33市町村
H26 22/33市町村

「こころのサポート」と防災教育 [野田村立野田中学校]

被災地 心のサポート

野田中生に防災授業

体験や思いを語り合う

ぜ教育に我々が行かなければいけないんだ」という方もいます。全市町村に協力いただきたいということで、県の総合防災室とずっと声掛けをしています。

28.心のケアと防災教育をどうやっていくかも課題です。野田中学校では、奥尻島で中学生時代に被災した先生を招き、話を聞きながらその先生の体験を振り返ることで自分の心と向き合うことをしました。中学校3年生の女の子から「実は押し留めてきたものがある」と言われました。それは「被災の定義ってなんだろう」ということでした。自分の心と向き合って次につなげていけるように教育委員会でも支援したいと思っています。

29.県では、全児童生徒を対象に「心と体の健康観察」という調査をしています。その調査だけでは見えない部分のストレスをチェックするためアンケートをとって、防災の学習のどんな点がストレスになっているかを、カウンセラーの方とともに、分析をして次の防災教育にという風に展開しています。

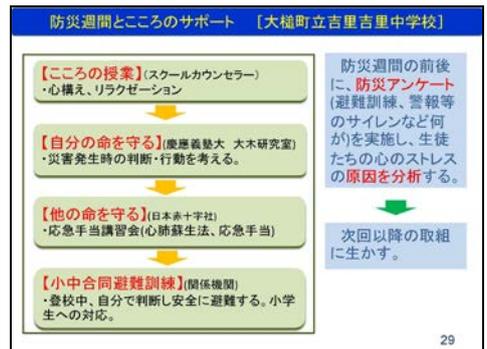
36.課題は学校がやること、お家でやること、地域がやることが同じ姿勢で防災教育に取り組まないと、やらなくていいんだという大人になってしまいます。どういう風に大人を巻き込んでいけばいいのか県内さまざまな取り組みがあります。

45.内陸の子どもたちのボランティアは今も継続しています。あらためて自分のこととして考える機会になっています。

46.県の訓練の項目の中に「学校・家庭・地域が連携した防災学習及び防災訓練」という訓練項目を含みました。県の教育委員会と県の総合防災室で市町村の防災担当の方と市町村教育委員会の方にぜひ学校を巻き込んで欲しいとお願いしました。そして将来、訓練に参加する子どもたちになって欲しいということで新たな訓練項目として取り組んでいます。こういった訓練を行うことで小学1年生の子どもも一人で自分が家にいたらどうしたら良いかということや、中学生であればどれだけ地域のために動かなければいけないのか、家庭で話し合ったなどの感想もあります。

53.課題は小・中・高と発達段階に応じてどういう風に体系化して防災教育をすすめていくかということです。

54.県内すべての学校がそれぞれの学校なりに防災教育・復興教育に取り組んでいけるように県教育委員会として働きかけていくことができると考えています。



【一関立本寺小学校】

「ワンデイ」(家庭防災の日)の取組

【目的】
学校での安全指導と合わせ、家庭での災害安全の意識を高める。

【実施内容】
学校で防災に関する学習を行い、家庭でも防災意識を高める。

【おうちのひと話し合って、おうちのひと書いてもらいましょ。】

●6.14の体験から伝えたいこと
●学校の防災学習について

→ 次は、地域を巻き込んでいく

H26 岩手県総合防災訓練における新たな訓練項目

新たな訓練項目
「学校・家庭・地域が連携した防災学習及び防災訓練」
○期 日 平成26年8月30日(土)
○想 定 岩手山噴火及び大雨による土石流の発生
○参加者 98機関、約6,000人

【参加校】
H26 八幡平市(田頭小学校)
 栗石町(上長山小学校)
 滝沢市(一本木小学校、柳沢小中学校、滝沢第二中学校)
H27 奥州市・金ヶ崎町

H25 県防災教育実践交流会(2月14日)

1年間の取組のまとめ、次年度に向けて

○復興教育推進校・県立学校から
・若手町立川口中
・大野高校、前沢明峰支援学校
○実践的防災教育総合支援事業の成果から
・大槌町立大槌小学校
○防災教育に係る学校訪問校から
・一関市立本寺小学校

○学校・家庭・地域が連携して、防災教育をどのように進めようか、磐石をはじめ、全国の先進的な取組を紹介。
○防災教育の継承が、世代を超えて災害文化の形成になる。
○「防災教育」=「人間教育」である。
○本県で推進する防災教育を含む復興教育に取り組む意味を再確認。

防災教育の取組状況(学校訪問、参観等から)

(1) 十面
① 「いわての復興教育」において、防災教育を位置付けて推進している学校が多い。
② 自校の防災教育のあり方を見直すとともに、管理面での改善を図っている学校が増えている。
③ 学習や訓練をとおして、児童生徒の自他の命を守る力を身に付けるとともに、支援者としての防災意識が高まっている。

(2) 一面
① 学校、地域による取組の差が大きい。
② 地震・津波災害以外の災害についての取組が十分に行われていない。
③ 学校・家庭・地域との連携の強化を図っていく必要がある。